歴史総合-DX

**1861年（万延2/文久元）公武合体と第一回遣欧使節団**

前年の「桜田門外の変」で屋台骨が揺らぎ始めた徳川幕府は、その直後から天皇の妹・和宮（かずのみや）を将軍家に迎える「公武合体」の政略結婚を画策し、この年の和宮の京からの江戸への東下と翌年の婚儀が内定した。一 方、殺害された井伊大老が主導した江戸・大坂（大阪） の開市・兵庫・新潟の開港を約束した安政の5カ国条 約（朝廷の勅許のない仮条約）の実施の5年延期を決議 して各国に伝え、条約に一度は調印したオランダ・イギリス・プロシャ（ドイツ）などを訪欧して、5年間の猶予延期をとりつけるべく、12月に「開市開港延期交渉使節団」（第一回遣欧使節、文久遣欧使節）を派遣することとした。この年、朝廷が外国を追い払う攘夷姿勢を 鮮明にしたことで、国内では外国人襲撃事件が続発し、 困惑した徳川幕府は、かつてシーボルト事件で国外退去とした長崎出島のオランダ商館のドイツ人医師で再び日本にやってきたシーボルト（1796〜1866）を正式に雇い入れることとした。